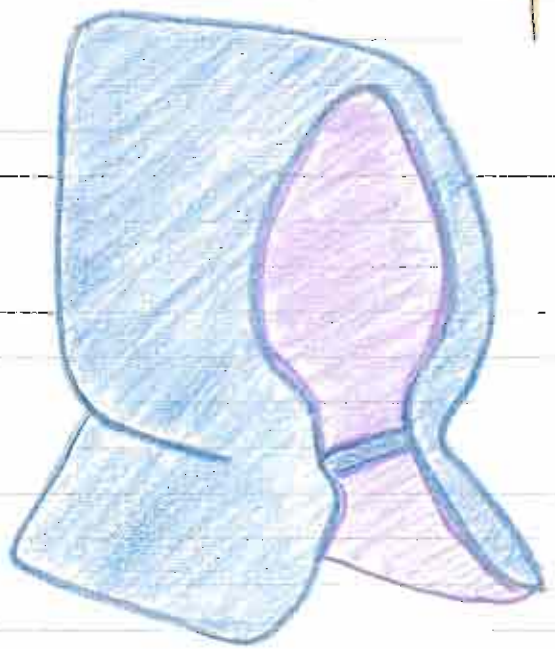
戦争のお話、聞かせて



豊島区立目白小学校
5年3組
大橋　愛子

目次

はじめに ---------- 1.

1.戦争の歴史 ---------- 3.

2.避難生活 ---------- 12

3.寝る生活 ---------- 21

4.こどもの生活 ---------- 28

おわりに ---------- 38

参考資料 ---------- 39

写真を撮影した人

・P.20, P.32 by 馨子

・P.1 by 文

・P.2, P.3, P.12, P.17, P.21, P.28 by 母

はじめに

私が戦争について自由研究をしようと思ったのは、学校でもらった広告で知った「戦後70年平和展」(としまセンタースクエア、2015年9月)に参加した時です。山田玲子さんの被爆体験のお話を聞いて、あらためて戦争の怖さを感じました。また、戦争体験された方々のインタビューを豊島区で映像に残していることを知り、私も自分のおばあちゃんに戦争中のことを教えてもらうことにしました。

おばあちゃんは戦争中には鳥取県米子市で生活していて、終戦の時にちょうど今の私ぐらいの年齢でした。私たちは、小学校で勉強をしたり友達と遊んだり、忙しいけれど自由な毎日を過ごしています。でも、戦争中はどうだったのでしょうか。私が特に知りたかったのは、そのころのこどもたちが制約の多い生活の中で、どんなことをして、何を考えていたのだろうか、ということです。

「戦後70年平和展」(としまセンタースクエア、2015.9.12)

「戦争を語り継ぐ2016年」(区民ひろば高松、2016.8.6)

この自由研究のために、まず、おばあちゃんに戦争中の生活についての短い手記を書いてもらいました。そして、興味を持ったことについて直接質問してくわしいことを教わりました。また、戦争の歴史については、昭和館の展示や区立図書館の資料等を使って調べました。「戦争の歴史」「避難生活」「窮乏生活」「こどもの生活」というテーマに分けて、おばあちゃんの手記を紹介したあと、内容を発展させたいと思います。

おばあちゃん質問中！

1. 戦争の歴史

6才の時に広島の平和記念公園を訪れました。

戦争はどのように始まって、どのように終わったのでしょうか。
多くの国の間で起こった争いの歴史は、とても複雑です。

～おばあちゃんの手記から～

昭和十六年十二月八日(一九四一年)、日本はアメリカとも戦争を始めてしまいました。大東亞戦争/太平洋戦争勃発です。満州事変(昭和六年九月十八日)から昭和二十年八月十五日まで十五年もの間、大日本帝国は戦争をし続け、昭和二十年八月十五日、敗戦。すべてが終わりました。終戦のきっかけはもうどたん場まできていて いろいろあったのでしょうか、八月六日広島へ原子爆弾が投下され、八月九日は長崎へと続けざまに投下されました。

私はまだ学校で歴史を勉強していません。だから、おばあちゃんが書いている「満州事変」から「大東亞戦争/太平洋戦争」が終わるまでの15年について、自分で本(『ポプラディア情報館：アジア・太平洋戦争』『写真で見る太平洋戦争とくらし・道具事典【戦争の記録】』)で勉強しました。そして、年表にまとめてみることにしました。

まず、「満州事変」から「大東亞戦争/太平洋戦争」が始まる前までです。

1931年　柳条湖事件…南満州鉄道(中国東北部)の線路爆破を中国軍のしわざとして、中国に対する軍事行動を始める。これをきっかけに満州事変(1931～1933)が始まる。

1932年　五・一五事件…軍部による政権樹立をはかる動きが出てきて、犬養毅首相が青年将校らに射殺される。

1933年　国際連盟(リットン調査団)が満州を中国主権の下の自治政府としたので、日本は国際連盟を脱退する。

1936年　二・二六事変…大蔵大臣の高橋是清らが、青年将校らに暗殺される。

1937年　盧溝橋事件…北京郊外で日本軍と中国軍が衝突する。これをきっかけに日中戦争(1937～1945)が始まる。

日本軍がアジアに進出しながら、国内でも力を強くしていった時代です。

第一次世界大戦(1914～1918)

1920年　国際連盟発足。(本部：ジュネーブ)

第二次世界大戦

1945年　国際連合発足(本部：ニューヨーク)

国際連盟って何？

第一次大戦の教訓から、1920年1月10日に正式発足した、初めての国際平和のための組織。1946年に解散。

この後に大東亜戦争／太平洋戦争が起こりました。
この言葉で気になったのは、1つの戦争なのに2つ名前があることです。それに、この時の戦争を「第二次世界大戦」と呼ぶこともあるので、よけいややこしいと思いました。

大東亜戦争／太平洋戦争（1941年～1945年）は、第二次世界大戦（1939年～1945年）のうち、日本がアジア・太平洋などで戦った部分を指すそうです。「大東亜戦争」（亞は亜の古い字です）は1941年12月12日に東條内閣が決めた名称です。
「太平洋戦争」はGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の考えによって、戦後に使われ始めた名称です。

では、第二次世界大戦というのはどんな戦争でしょうか。それは1939年から1945年まで行われた全世界規模の戦争のことで、第一次世界大戦（1914～1918）と区別するために「第二次」となっています。この戦争で日本は三国同盟を結んだドイツ・イタリア等とともに枢軸国として、アメリカ・イギリス・ソビエト連邦・中華民国等の連合国と対戦しました。第二次世界大戦のもともとの戦場はヨーロッパで、1939年9月にドイツ軍がポーランドに侵攻したために、イギリスとフランスがドイツへの宣戦布告したことが始まりだそうです。

日本が第二次世界大戦に加わったのは1941年です。その前の年の1940年に、日本は東南アジアへの進出を有利にするため、ドイツ・イタリアと「日独伊三国同盟」を結びました。日本の動きをアメリカが止めようとしましたが、交渉はうまくいかず、日本は1941年12月にハワイの真珠湾を攻撃し、イギリス植民地のマレー半島に上陸しました。宣戦布告後の半年間くらいは、日本は勢いよく進撃していました。1941年12月には香港のイギリス軍が日本軍に降伏しました。1942年1月、アメリカ植民地のフィリピンで首都のマニラを、日本軍が占領しました。2月にはイギリス植民地のシンガポールを占領し、3月にはオランダ植民地のジャワ島でオランダ軍を降伏させました。

日本の勢いがなくなったのは1942年にアメリカの基地であるミッドウェー島を攻撃して敗北してからです。その後、イギリス領のガダルカナル島でアメリカ軍に負けるなど不利なことが続き、1944年～1945年にはフィリピン戦で惨敗しました。1942年4月にはアメリカ軍による日本国土への攻撃も始まり、1945年8月15日、日本は「ポツダム宣言」を受け入れて降伏しました。

第二次世界大戦～大東亞戦争（太平洋戦争）の簡単な年表を書きます。

1939年 ドイツ軍がポーランドに侵攻して、第二次世界大戦が始まる。

1940年 イタリアがフランス・イギリスに宣戦布告する。

日本軍がフランス領北インドシナに武力進駐する。

日独伊三国同盟が結ばれる。

1941年 戦争を回避するための日米交渉が始まる。

日本軍が真珠湾攻撃、マレー半島上陸を行い、

アメリカ・イギリスに宣戦布告する。

1942年 日本軍がマニラ（フィリピン）やシンガポールを占領する。

日本軍、ミッドウェー海戦で大打撃を受ける。

1943年 日本軍がカダルカナル島から撤退し始める。

9月、イタリアが連合国に無条件降伏をする。

1944年 サイパン島・グアム島の日本守備隊が全滅する。

1945年 3月、東京大空襲。

硫黄島で日本守備隊が全滅する。

5月にドイツが連合国に無条件降伏する。

6月、沖縄で日本守備隊が全滅する。

7月にポツダム宣言が発表される。

8月6日に広島、9日に長崎に原爆が投下される。

8月8日にソ連が日本に宣戦布告する。

8月14日、日本がポツダム宣言の受け入れを決定する。

8月15日、昭和天皇の玉音放送。

大東亞戦争/太平洋戦争についての簡単な地図をかきます。

連合国側　VS　枢軸国側

大英帝国
アメリカ合衆国
フランス共和国
中華民国
ソビエト連邦
など

ドイツ国
大日本帝国(日本の当時の名)
イタリア王国
など

参考:『写真でみる太平洋戦争とくらし・道具事典【戦争の記録】』pp.6-7

日本が戦争に負けた1945年の8月には、「原子爆弾」が広島と長崎に落とされました。核兵器が実際に使われたのは、この時が始めてでした。原爆がもとで、広島では1945年末までに約14万人の人が、長崎では約7万人の人が死亡しました。この爆弾の恐ろしさは、私も前から知っていました。小学校2年生の時に広島県の原爆資料館を訪れたからです。資料館では原爆の被害が模型や人形で再現されていて、亡くなられた人たちの遺品が展示してありました。体験された人たちのビデオメッセージを見ることもできました。とてもショックを受けたのをおぼえています。

2. 避難生活

千代田区九段下にある昭和館の前です。

日本各地への攻撃が始まってからは、さまざまな対策がとられました。昭和館には当時の様子が再現されていて、怖さがよみがえる気がします。

～おばあちゃんの手記から～

駅前の大通りの建物疎開が始まり、あっという
ほどの短い期間で、米子駅から真すぐ、中海に面した
公園までの道路が出現しました。いつもいつも
緊張続きだったような気がします。心が安らぐ
ということはなかったような気がします。本物の
戦争がはじまり、ジワ、ジワと迫ってくる。でも、
どうしたらよいのかは、わからない。

戦争で人が倒されるのを直接、目の前で
みたのは二度です。鳥取県米子市は山も多く、
町は大きくはないのですが、昭和二十年の
初夏頃からアメリカの飛行機がきて、機銃掃射で
ねらいうちをして、隣のおばさんがその場に
倒れて亡くなりました。同じ学年の男の子が一人、
警戒警報から空襲警報に変わった時、あわてて
駅前の防空壕へ入ろうとしたのですが、駅前
ですから防空壕は満員で、入り口で
機銃掃射にやられてしまいました。いずれの
場合も私はその数メートルうしろを歩いていて、
私は死の隣までいったのだったと思います。

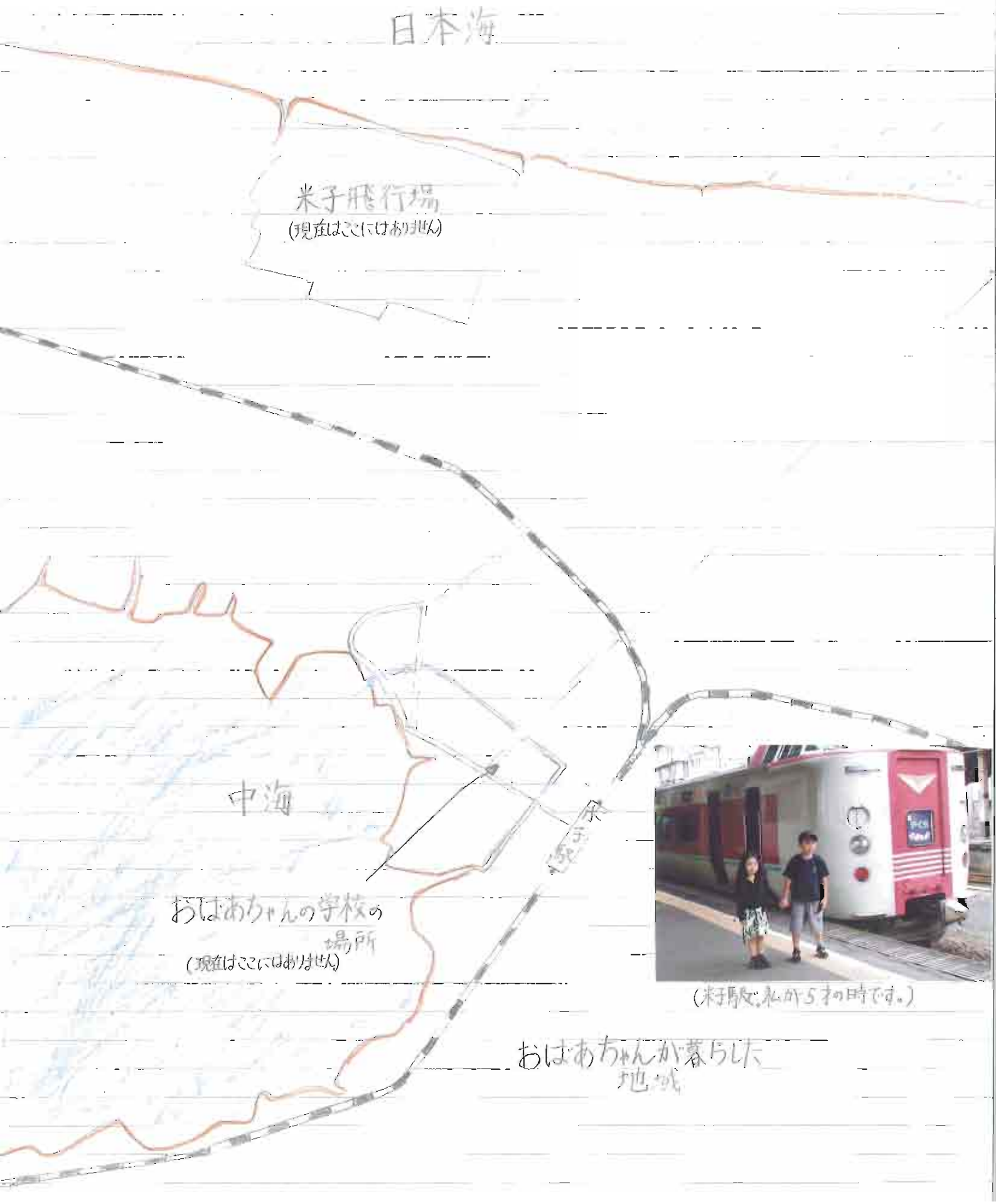
ここに書いてあることはいつごろのことなのか、おばあちゃんに聞いてみたら、戦争の最後の年の夏の間のできごとだったと教えてくれました。東京大空襲や広島・長崎の原爆投下ほどの規模のことはありませんでしたが、鳥取県米子市でも1945年の夏は大変苦しい時期でした。戦争中はいつでも、命の危険のことを考えなくてはなりませんでした。実は、おばあちゃんが戦争中に鳥取県米子市にいたのは、避難のためです。おばあちゃんが親といっしょに住んでいたところより、鳥取県の方が安全だと考えられていたので、米子市の親戚の家に預けられていたのです。

私は、戦争中の生活について詳しく知りたかったので、九段下にある昭和館を訪れました。昭和館のことは、学校でもらったパンフレットで知りました。昭和館では、戦中・戦後の時代についての資料や展示を見ることができます。常設展示室では音声ガイドを貸してもらえるので、とても勉強になります。

昭和館の7階は戦中の生活についての常設展示があって、展示は4つのブースに分かれています。第3ブースは「戦中の学童・学徒」で、中学生以上の労働のことの他、6～12才の児童の避難生活についても知ることができます。私のおばあちゃんのように田舎の親類に預けられることを「縁故疎開」と呼ぶそうです。また、「集団疎開」といって、学校単位で移住することもありました。集団疎開は、『ポプラディア情報館 アジア・太平洋戦争』(P128)によると、1944年にアメリカ軍がサイパン島に上陸した時に、本土空襲を予想して強制的に行われたそうです。「縁故疎開」と「集団疎開」をまとめて「学童疎開」と呼びます。学童疎開は、空襲の時に子どもたちが危険な目にあったり、大人の消防活動のじゃまにならないために行われました(『ポプラディア情報館 アジア・太平洋戦争』P128)。

私は、「学童疎開」については今までにも何回か聞いたことがありましたが、おばあちゃんが書いている「建物疎開」という言葉は初めて知りました。総務省ウェブサイトの「用語集―戦時中の生活を知るための用語集」というページで調べて、建物疎開は「空襲のときに消火活動などがしやすいよう、建物を強制的に取りこわすこと」を指すことがわかりました。

おばあちゃんに建物疎開の様子を聞くと、駅前のお友だちの家のことを教えてくれました。お友だちの一家は、自宅の土台以外の全てを郊外に運んで、土台はその後、撤去されたそうです。建物疎開の正確な時期を知るために「米子市三十周年史」を読んだら、「物情騒然たるうちに七月県は緊急措置として、市内重要施設周辺の建物強制疎開に着手した」(P43)と書いてありました。この時に対象になったのは米子駅付近の「二万一千六百九十坪」で、さらに8月上旬には第2次の建物疎開があったそうです。終戦直前の1か月で、米子の町は大きく変わりました。



(米子駅で私が5才の時です。)

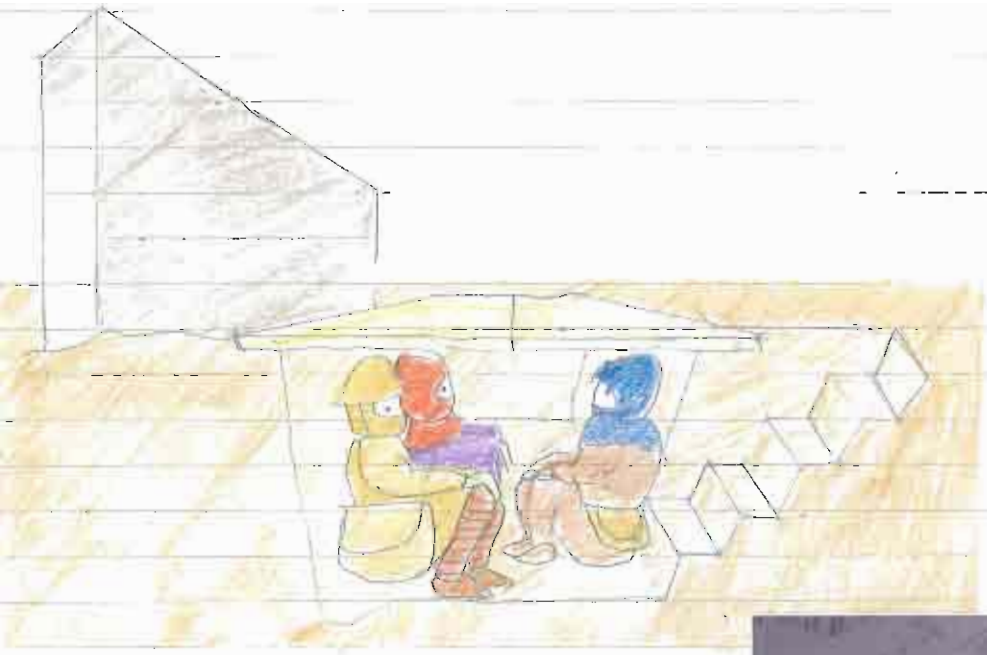
米子市の実際の空襲はどのようなものたったのでしょう？　総務省のウェブサイトに「米子市における戦災の状況（鳥取県）」というページがあって、それを読むと1945年の7月23日に山陰地方への本格的な爆撃が始まって、米子市は24日から28日まで攻撃を受けたことがわかります。28日は特に被害が大きく、次のように書いてありました。「米子市内も28日はいたるところが攻撃され、米子駅、日本曹達米子工場を目標にロケット弾投下、機銃掃射が繰り返された。」昭和館で見たデータによると、戦争によって鳥取県米子市内で亡くなった人の数は14名ということでした。その14名の中に親しくしていた人がいたことは、おばあちゃんにとって忘れられないことです。

「機銃掃射」という言葉は、おばあちゃんの手記にも繰り返されているし、おばあちゃんが戦争の話をする時にもよく出てきます。これは、飛行機から、町をめがけて爆弾を落とすのではなく、機関銃で人間を狙って撃つ攻撃方法だそうです。こちらから飛行機を操縦している人が見えるほど斜めに近付いてきて撃つので、逃げようがなかった、と話してくれました。

対戦国の攻撃を知らせる方法として、おばあちゃんが書いているように、警戒警報と空襲警報がありました。昭和館ではこの2つについて詳しく知ることができ、音も聞けます。警戒警報は避難をしなさいという合図で、藍白染め分けの旗が使われて、サイレンが3分間、鳴ります。空襲警報は防空壕に入りなさいという合図で、赤白染め分けの旗が使われて、サイレンは8秒の間をあけて4秒ずつ10回鳴ります。

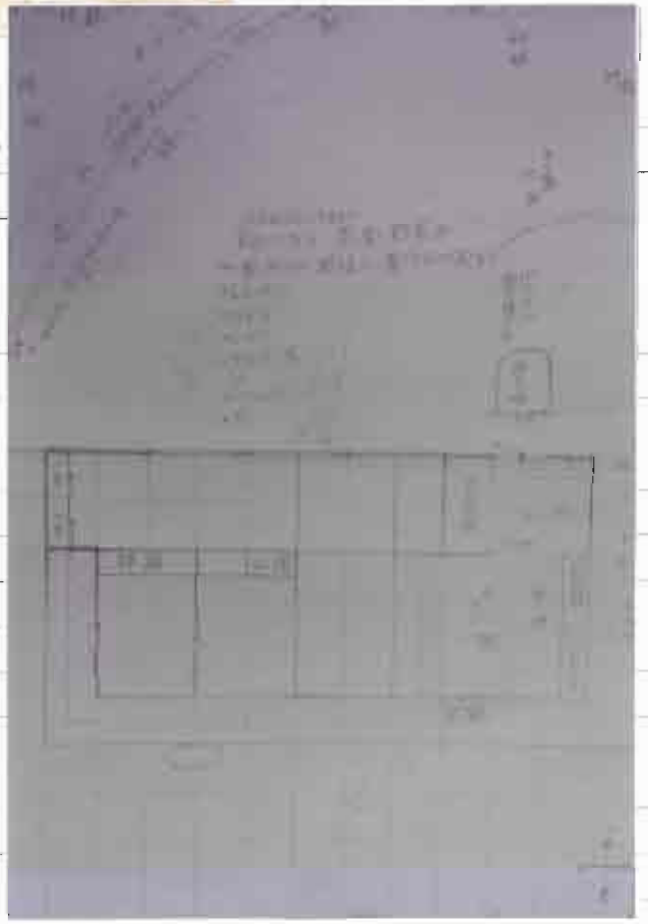
防空壕というのは、空襲の時に身を隠す場所です。防空壕の種類には「家の中から入れる床下式、庭にほった縦穴式、石がきを利用した横穴式のもの」がありました(「用語集—戦時中の生活を知るための用語集」)。『米子市三十周年史』によると、防空総本部の指令で、米子市は「横穴式防空壕三百メートル、掩蓋式防空壕五十ヵ所」(P.43)を作らなくてはいけなかったらしいです。おばあちゃんに聞いたら、米子駅の駅前にとても大きな防空壕があったそうです。これがひとつで300メートルあったがどうかはわからないのですが、空襲の激しい日には、かなりたくさんの人が押しかけていたそうです。

防空壕は家庭で作ることもタク、おばあちゃんのいた家には山があったので、山の斜面に横穴式の防空壕を作りました。でも、米子駅や飛行場のあたりと違って、おばあちゃんが暮らしていたあたりでは、防空壕が役に立つほどの攻撃は受けなかったそうです。



←横穴式防空壕

おばあちゃんがいた→
米子の家の図



3. 窮乏生活

戦争中の女学生の服を着せてもらいました。

物資は大変不足していました。以前どおりの食べ物や衣服が手に入らない状況で、みな、我慢と工夫をして生活していたことがわかります。

～おばあちゃんの手記から～

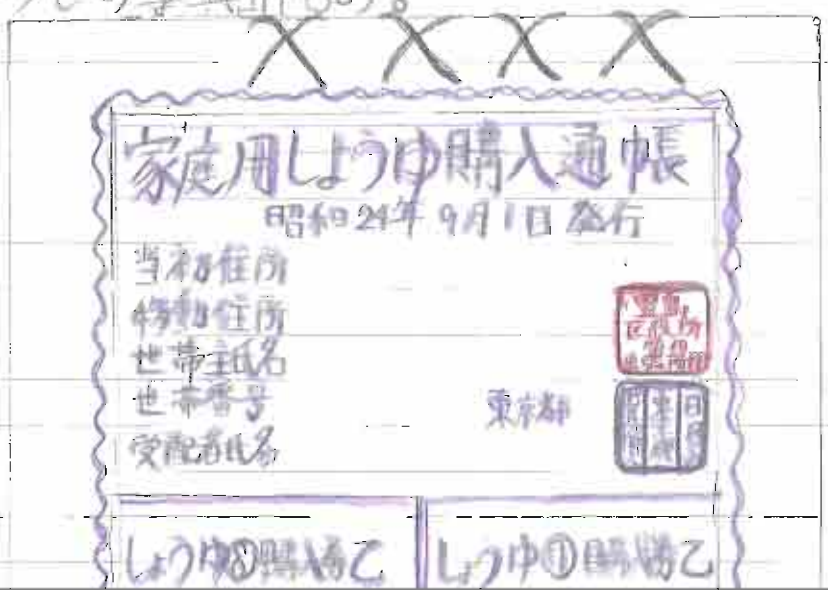
すべてが戦争一色になってしまい、味噌や醤油・砂糖・油などがたちまちお店から消えてしまいました。製造もされにくくなったこともあるかと思うのですが、原料もなくなっていくと予想がついての買い占めもあったのでしょうか。兵隊さんの服を急に多く製造しなくてはならなくなったためだと大人は言っていました。軍服を一刻も早くと一般の衣料をつくる余裕がないのでしょうか。手ぬぐい一枚も、くつしたも買えなくなってしまいました。

ただ例外は「お米」をもっていくと、お店ではなく、奥の方から品物をとってきて、「今日だけですよ。たまたま家用に残していたけど、まぁうちは古いのをつぎあてをしてつかいますわ。ほかの人にはいわんといてくださいよ」ということだ、お米さえあればなぁ、といううわさがたちました。あるていどは本当のことのようでした。

一年に一度ぐらい、学校へも長ぐつ・色鉛筆などの配給はあるのですが、一つの組に五十人前後の女子（男子組も同数程度）がいて五十倍では、とてもあたったことがありません。

日本がアメリカとイギリスに宣戦布告してから、物が大変不足するようになりました。戦争と物不足について、『戦争とくらしの事典』に次のように書いてあります。「はたらき手の男性が少なくなって農工業の生産量はへり、砂糖や灯油、綿といった植民地や海外にたよっていた物資の輸入は激減しました。そして、食料や物資は軍や戦地に優先的にまわされたので、国内の一般の人びとの食料や生活必要品の不足は深刻になっていきました」(P.130)。

そして、そのころから「切符制」「配給制」が始まりました。切符制というのは、年に1－2回配られた切符の割当分だけ買える制度です。1940年に砂糖・マッチ、1942年には衣料品・みそ・しょうゆが切符制になりました。配給制というのは、1日1人あたりの割当量が決められて、配給通帳を持参して買う制度です。1941年に米・酒・木炭などの燃料・魚介類、1942年には野菜類の配給制が始まりました(『戦争とくらしの事典』P.130)。



おばあちゃんも切符制や配給制にたよった生活をしていたのだと思ったので、聞いてみましたが、そうではありませんでした。一つの理由は、おばあちゃんの地域で切符を使えたのは最初の1〜2年くらいで、しばらくすると物が不足してほとんど買えなかったからです。もう一つの理由は、食べ物などは自分のところで用意できたからです。おばあちゃんのいた家では農業も営んでいて、「四反百姓」だったそうです。「四反」というのは田んぼの広さのことで、一反が300坪なので1,200坪の田んぼを持っていたということです。お米を作っている農家については、お役人さんが収穫量と家族が食べるお米の量を見積もって、保有米(家庭用のお米)と供出米(国に出すお米)の量を決めます。お米を作っている農家は時々、お酒を造っていないかどうか調査されたそうです。勝手にお酒を造るのは禁止されていたからです。おばあちゃんのところではお酒を飲む人がいなかったし、造ったことはないそうです。

「供出」というと『ポプラディア情報館 アジア・太平洋戦争』(P.123)に書いてあるように、飛行機や戦車用に金属製品を差し出したことが有名ですが、おばあちゃんのところでも金の指輪や鉄の小物等を渡しました。

おばあちゃんのところではお米以外の農作物も作っていて、野菜類がありました。おみそは大豆と大麦で手作りして、おしょうゆは親戚が手作りしているのをもらっていました。お砂糖は手にはいりませんでしたが、さとうきびを作っていたので、それをかじったりしていました。マッチもありませんでしたが、火打石のようなものを使っていたそうです。

燃料は、山から木や竹を取ってきて、作っていました。米子には海があるので、魚を食べることもできました。食糧不足が深刻になった時期でも、漁師の奥さんがトビウオなどを持ってきてくれて、サトイモなどと交換してくれました。また、海水を煮詰めてドロドロにしたものを一升瓶で保存して、塩として使いました。

このような生活だったので、戦争中に食べ物ですごく困っていたわけではないけれど、1945年6月頃からは食事のおかわりはできなくなってしまったそうです。

衣料についても、おばあちゃんのところでは切符を使ったことはなかったそうです。それは、もともと持っていた普段着をつくろいながら使っていたからです。でも、結婚式など特別なことがある家では、衣料切符が足りないようなこともあったようです。

衣料の製造工場も、おばあちゃんが書いているように、軍服をたくさん作るようになりました。衣服の縫製で伝統のある岡山県南部地域では、学生服から軍服へ移行して、2交代で軍服に取りかかったり、家内工業でも1台のミシンを家族で交代で使い、そのミシンは大活躍で、町は熱気でムンムンしていたそうです。

衣料が不足していく一方で、すでに持っている衣料を守ろうとする「衣料疎開」が1944年から始まりました。(咲子市三十周年史』P46)。衣料疎開という言葉は今回、初めて知りましたが、空襲で衣料が燃えてしまわないために、安全そうな地域に避難させておくことだそうです。おばあちゃんの近所では、京都や大阪に嫁いだ娘さんの衣料を預かっている家がありました。

私は、配給というのは家ごとに並ぶものだと思っていたので、学校にも配給品が来たというのは意外でした。おばあちゃんに詳しく聞いたら、長ぐつの他、カッパ・傘など1943年くらいまで配給されたとのことでした。長ぐつは、ゴムが大変不足していたので、貴重品でした。でも、50人に1点だけだと、どうやってもらう人を決めたのか不思議でしたが、先生による抽選だったそうです。

4. こどもの生活

『幼年倶楽部』付録のクライターを作っています。

戦争中も、こどもは大人とは違う過ごし方や感じ方をしていました。食べる楽しみ、遊び、学校についてなど、とても関心を引かれます。

～おばあちゃんの手記から～

昭和一九年の春ごろでしょうか。空襲そのものはまだ鳥取県米子市ではそんなにひどくなく、日野川の川原の石を運んだりもしましたが、土手で日の丸べんとうを食べたり、楽しみもありました。竹のある家は竹やりを何本かつくっていきました。竹は強いから本当の槍として使えるね、といって、竹をナイフ一本でするどくとがらせ、工夫してつくりました。

ふと気がついてみると、男の子は竹を鋭くけずって兵隊ごっこをしていたものです。

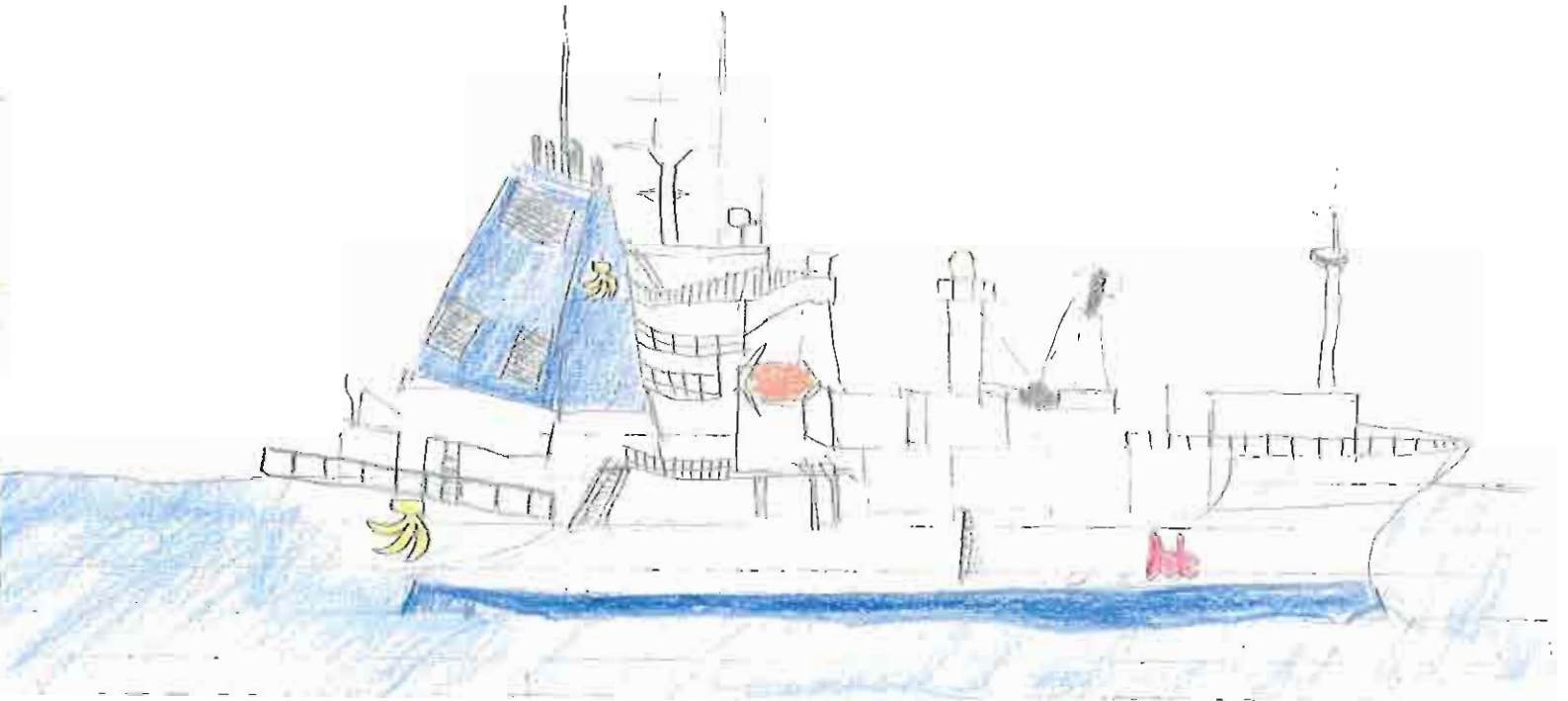
学校では、男性教師が次々に出征されたからでしょうか、よく兵隊さんのご苦労を考えろ、感謝の心が足りない、と女性の先生に男ことばでどなられることも多くなったように思いました。

学校で使う文房具も不足していました。鉛筆は短くなっても使えるように竹で作ったはさむ道具をつけました。消しゴムもなくなり、指先にツバをつけて消す、などということも、一人がするとわれも～～とたちまちそれがあたりまえ、ということになりました。でも、昭和二十年の四月以降は学校にはほとんど行きませんでした。

おばあちゃんの手記の中で「楽しみ」という言葉が出てくるのは、日の丸べんとうを食べるところだけです。私は、食べることが大好きなので、気持ちがわかります。日の丸べんとうというのは、昭和館にサンプルがありましたが、白いご飯の真ん中に梅干しが乗っかっている、日本の旗のようなおべんとうです。おばあちゃんが戦争中に食べていたご飯は、最初は白米でしたが、終戦近くになると大麦が三分の一位混ざったものになっていきました。おばあちゃんは、この麦ご飯もおいしくて、大好きだったそうです。

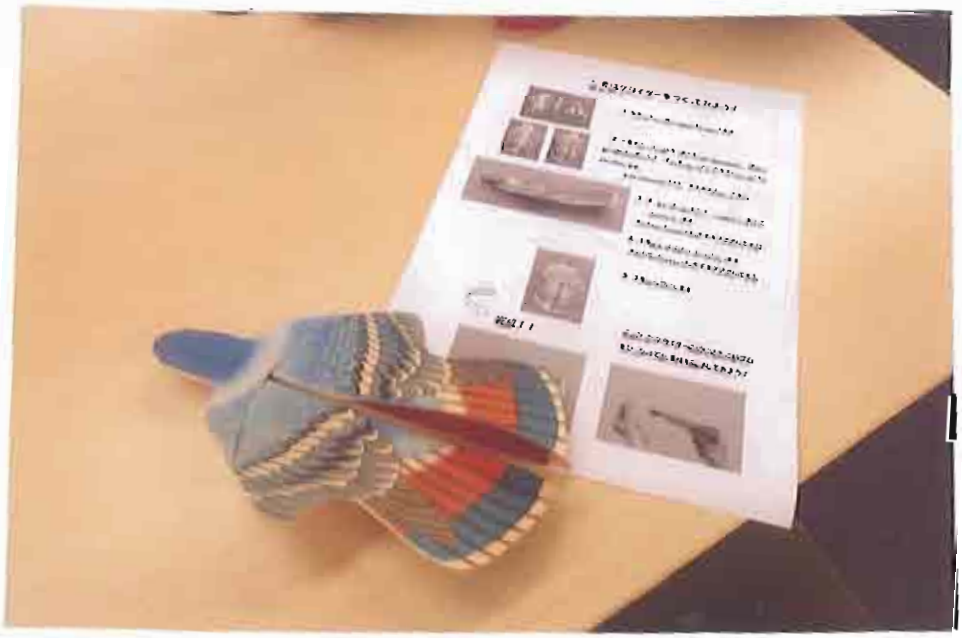
この話を聞いて気が付いたのは、昭和館で見た戦時中の食事とは違っていることです。昭和館では戦時中のご飯のサンプルがありましたが、ご飯の中に雑穀やおいもがたくさん混ざっていました。また、すいとんと呼ばれる、小麦粉を使った主食も紹介されていました。この2つは農村以外で主に食べられていたのかもしれません。

おやつについても教えてもらいました。さつまいもは、ご飯に入れて食べなかったけれど、おやつでおいしく食べていたそうです。また、山で渋柿が獲れたので、それで干し柿を作ってもらっていました。おばあちゃんが一番好きだったおやつは、干しバナナでした。バナナを買ってきて10日以上干して作っていたのですが、1942年ごろからバナナが手に入らなくなってしまいました。輸入しにくくなったのだと思います。おばあちゃんがまわりの大人に、なぜバナナを買ってくれないのかたずねたら、戦争でバナナを乗せた船が邪魔をされて、陸に近付けないから、と教えられたそうです。それを聞いたおばあちゃんは、山の上から毎日、海を見張りました。バナナの船は日本海ではなくて太平洋をやってくるのに、それがわからなかったそうです。



子どもの食べる以外の楽しみは、遊ぶことだと思います。おばあちゃんの手記では男の子が兵隊ごっこをしていたと書いてありますが、このことは昭和館で学んだことと一致します。戦争中は贅沢品や金属・ゴムなどの軍事物資でできた道具はなくなってしまったので、遊びも限られた中で楽しんだのです。男の子の場合、戦争ごっこや兵隊ごっこが流行っていました。おばあちゃんの近くではターザンごっこもあったそうです。

私は、今年7月の「子ども霞が関見学デー」に、厚生労働省の昭和館展示に行ってきました。そこで、戦争中の少年倶楽部を読んでみると、戦争に関係あるようなお話がたくさん載っていました。また、少年倶楽部の第14巻6号(1936年6月)の付録の「デンショバトグライダー」を組み立ててみましたが、戦闘機をまねたものだと思います。



「デンショバトグライダー」完成品

昭和館で、戦争中、女の子には「看護婦ごっこ」が人気だったと知りました。また、女の子用の雑誌も出版されていたし、双六もあったことがわかりました。雑誌や双六には、戦争の影響が強く出ていました。

おばあちゃん自身がどのような遊びをしていたのか、きいてみると、双六はしたことはなくて、雑誌も途中で読まなくなってしまった、と教えてくれました。雑誌は幼稚園の時から読んでいて、人形やきれいな服の女の人が載っていて気に入っていたのですが、アメリカ等と戦争が始まると、モンペ姿の人や戦車に変わっていったそうです。「ピカリノクニ」という雑誌だったと思う、とのことでした。かるたをよく買ってもらっていたけれど、1942年頃からは、かるたの内容が戦争の影響で大きく変わってしまったので、あまり遊ばなくなりました。このかるたは、『戦争とくらしの事典』で紹介されている「戦争かるた」だと思いますが、それは、「知らず知らずのうちに、子どもたちに戦争への気がまえをうえつけ」(P.69)るためのもののようです。

人形を大人に作ってもらったこともあったのですが、これも1942年頃からは人形用の布が不足し、お店でも人形が消えてしまいました。それに、そのころになると、人形で遊ぶような気分もなくなってしまったそうです。

おばあちゃんが遊びの代わりにしていたのは、お手伝いのようなことでした。山などで、七輪の燃料にするための松かさや孟宗竹、食用のユリ根・どんぐり・野生のみつば、油を作るための椿の種やヒマワリの種を集めました。ヒマワリの種は、供出することもあったそうです。また、海でトビウオを捕ったこともありました。このようなことを、いとこやお友だちと一緒にすることが、日常生活の楽しみでした。作業は遊び半分だったし、収穫がタクいと大人にほめられたので、うれしかったそうです。

おばあちゃんの手記には、学校の話があまり出てきません。それは学校が嫌いだったからではなくて、学校が戦争ですっかり変わってしまった上、終戦直前には行くことさえできなくなってしまったからです。おばあちゃんが6才で入学した時にはすでに、アメリカ等との戦争が始まっていたし、学校は尋常小学校ではなく、国民学校になっていました。

『戦争とくらしの事典』を読むと、1941年4月から1947年3月まで、小学校が国民学校と呼ばれたことがわかります。国民学校では行事や団体訓練を重視していて、「国民錬成の道場」(P.66)を目指していました。おばあちゃんの学校では、若い男の先生が出征してしまい、その代わりに若い女の先生が多くなりました。教員免許取得のための期間が短縮されて、高等女学校(5年制)の4年目くらいで取れるようになっていたそうです。男の先生が少なくなってしまったので、女の先生に男性的な強い言葉を使って指導されることもあったのです。

1943年までのことで記憶しているのは、イナゴ集めだそうです。イナゴを各自、田んぼで捕ってきて、袋に入れて学校に持って行くのです。関西方面で佃煮にして食べてもらうために、送っていたそうです。

1944年になると、戦争が次第に激しくなり、物不足もひどくなりました。教科書は1冊くらいしかなく、ノートも買えない状態でした。新聞紙を持って行って、欄外を使って漢字練習などをしました。そのころ、よく、「この地区に爆弾を落とします。善良な皆さんは逃げてください。」などと日本語で書いてあるビラが空から落ちてきたのですが、大人から、その紙の裏が白紙なので集めてノートを作るように、と言われたこともありました。午後まで授業の日もあったのですが、お弁当を持ってこられない子が何人もいるほど、食糧不足が深刻でした。学校では毎日、わら半紙に兵隊さんへの慰問文を書くように、指導されました。勉強については、九九をおぼえるように言われたことが、印象に残っているそうです。授業中に空襲警報が鳴ることもあって、すぐに家に走って帰らなくてはなりませんでした。

1945年4月の始業式で、校長先生から特別なお話がありました。通学するのは危険なので、今学期は居住地区ごとに神社などで集まるように、という内容でした。それから1週間くらいは学校に通って、片付けなどをして、その後は同じ地域のお友だちと一緒に神社に通いました。先生もいらして、皆でラジオ体操や落ち葉ひろいをしました。近くの田んぼの虫取りをしたこともありました。上級生は、農家の梨の薬かけの手伝いをするように言われたこともあったそうです。そんなことが、夏休み前まで続いたそうです。

最後に、おばあちゃんが学校でつらかったことを話してくれました。それはお友だちの病死です。クラスには50人位の女の子がいたのですが、学期ごとに少ない時で2人、多い時には4人のお友だちが、結核で亡くなってしまうのです。結核は感染力が強いので、きょうだいを6人亡くしたお友だちもいたそうです。当時は結核に効く薬がなかったのです。子どもが皆、お医者さんにかかる余裕もありませんでした。

戦後にアメリカからストマイ(ストレプトマイシン)という抗生物質がはいってきて、結核は治せる病気になりました。その時におばあちゃんは、一つの時代が終わったことを実感したそうです。

おわりに

私は、戦争についての物語や体験記を読んだり、博物館に行ったり、講演会でお話を聞いたり、豊島区の「記憶の遺産80」の動画を見たりするたびに、自分なりに戦争を想像していました。でも、おばあちゃんの話を聞いて、そのどのイメージとも完全には同じでないと感じました。おばあちゃんと同世代の鳥取県の人たちの手記を読んでも、おばあちゃんの経験と重なるところと重ならないところがあるので、それぞれの人がそれぞれの戦争体験をしていたのだと思います。

おばあちゃんから今までも戦争中のことを時々少しずつ聞いていたけれど、今回はまとめてたくさんのことを教えてもらえました。干しバナナの話など、とてもよくわかるところもありました。戦争全体のことは知らないことが多かったですが、読みやすく説明している本を図書館で見つけてきて勉強できたので、良かったです。

戦争を体験していない私たちが戦争を本当に理解するのは、むずかしいです。でも、一人一人が、大変な時代があったことを忘れないで、平和が続くように願うことが大切だと思いました。

参考資料

図書

書名	出版元	出版年	図書館名
『米子市三十周年史』	米子市	1959年	国立国会図書館 318.372
『ポプラディア情報館 アジア・太平洋戦争』	ポプラ社	2008年	豊島区立千早図書館 031
『戦争とくらしの事典』	ポプラ社	2008年	豊島区立千早図書館 210
『孫や子に伝えたい戦争体験』	鳥取県	2009年	(私物)
『ジュニア歴史資料』	浜島書店	2012年	(私物)
『写真でみる太平洋戦争とくらし・道具事典『戦争の記録』』	金の星社	2016年	豊島区立目白図書館 210

パンフレット

「伝えたい昭和のくらし：戦中と戦後」	昭和館	2015年	(私物)
「戦中・戦後のくらし 昭和館」	昭和館	2015年	(私物)

インターネット

総務省「米子市における戦災の状況(鳥取県)」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/chugoku.01.html

総務省「用語集―戦時中の生活を知るための用語集」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/word/index.html